

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13206

研究課題名（和文）「ウザクバイ」対「ウズベクのゾルゲ」：1930年代日本の中央アジア進出を巡る攻防

研究課題名（英文）"Uzoqboy's vs. "Uzbek Sorge": Conflict over Japanese Advance into Central Asia in the 1930's

研究代表者

小野 亮介 (Ono, Ryosuke)

早稲田大学・人間科学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：00804527

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：2020年春以降のコロナ禍により本研究も計画を見直さざるを得ず、代替手段として主に日本語外交文書に取り組んだ。その結果、シベリア出兵に関連して1918-1920年間に新疆に駐在した日本軍人の活動を明らかにし、さらにこの問題を発展させ、宇山智彦氏（北海道大学）と共に、カザフ自治政府アラシュオルダの幹部による日本政府への支援要請書（1919年）を検討した。他方、1938年にトルコで開催された「近東会議」に焦点を充て、日本軍人・外交官による中央ユーラシア出身のテュルク系ムスリムへの反ソ的アプローチが破綻したことを論じた。また、戦間期のタタール語雑誌2点の記事目録を作成し、自作サイトで公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特徴は、日本の対ソ戦略を中央ユーラシア出身のテュルク系ムスリムの政治家や亡命者と関連付けながら考察したことにある。従って、日本語、英語、トルコ語などの多言語史料を活用したことにより、従来互いに没交渉であった戦間期の日本外交史研究と中央ユーラシア史・トルコ史研究を架橋するアプローチを提示したことが本研究で得られた成果の学術的意義と言える。また、研究過程で報告者自身が発見した上記マルセコフ要請書は、共同研究者の宇山氏によってカザフスタンの学術界にも紹介され、アラシュ・オルダ研究に新たな光を当てる史料の発見として高い評価を得た。

研究成果の概要（英文）：The occurrence of the COVID-19 pandemic forced me to reconsider my research plans, and as an alternative, I have switched my focus mainly to Japanese diplomatic archives. Consequently, I elucidated the activities of the Japanese military mission stationed in Xinjiang between 1918 and 1920 in connection with the Siberian Intervention and further explored this issue by examining a request to the Japanese Government by the leader of Alash Orda, the Kazakh Autonomous Government, for support, together with Professor Tomohiko Uyama (Hokkaido University). I also homed in on the Near East Conference held in Turkey in 1938 to argue that the anti-Soviet approach of Japanese officers and diplomats toward Turkic Muslims who had fled from Central Eurasia ultimately failed. Additionally, I compiled indexes of two Tatar-language journals published in the interwar period and made them available on my website.

研究分野：テュルク民族史

キーワード：トルキスタン 新疆 中央アジア 諜報 亡命者 シベリア出兵 カザフ 東トルキスタン共和国

1. 研究開始当初の背景

本研究の起点となる旧ソ連領中央アジア([西]トルキスタン)と中国領新疆(東トルキスタン)には、ウズベク人やウイグル人などテュルク系の人々が集住している。前者の地域では、1917年のロシア革命とそれに続く内戦、「バスマチ運動」と呼ばれる反ソ・ゲリラ運動などの一連の政治的変動のため多くの人々が中東やヨーロッパへ逃れた。有力な亡命者である M. チョカイがパリで指導した反ソ組織「トルキスタン民族同盟」は亡命者研究において欠かすことのできない存在である。

一方新疆では1930年代初頭以降、漢人政治家・軍人の独裁、圧政に対するムスリムの反発から、やはり一連の政治的動乱が生じた。この動乱は第1次東トルキスタン共和国樹立(1933)をもって頂点を迎えるが、ソ連の介入により数か月で瓦解し、共和国に参画したテュルク系知識人の一部はアフガニスタンや英領インドに逃れ再起を図った。彼ら東西トルキスタンから逃れた亡命者は、チョコカイや「同盟」機関誌を媒介として相互に結びついた。

こうしたテュルク系亡命者は、欧米やトルコの先行研究において反ソ的ナショナリズムの担い手として高く評価され、近年では旧ソ連諸国でも共産主義に替わる新たな民族的英雄として見直されている。その結果、バスマチ運動と東トルキスタン共和国に参画し、カーブルで反ソ運動の組織化を試みた亡命者 S. バフティヤール、ソ連のスパイという正体を偽り同地での「同盟」の活動を統括した亡命者 M. アイカルルがテュルク系亡命者研究において周縁的な存在として浮び上がるようになった。

翻って日本の対ソ外交については、外交史料館など豊富な資料の活用が可能であり、1930年代半ばにおける内モンゴル工作の延長線上で関東軍が中央アジアへの進出を視野に入れていたことが知られている。西進を目指す軍部にとってもアフガニスタンは重要な工作地点であった。実際、武官としてカーブルに派遣された宮崎義一少佐が種々の謀略、諜報に着手したものの、アフガン政府の抗議により退去処分となっている(1936-37)。

かくして1930年代後半のアフガニスタンを舞台にして、東西トルキスタン人亡命者の反ソ的民族運動と日本の対ソ戦略とが接点を持ち、実際に両者の間で交渉がなされるが、従来のトルコや旧ソ連圏での亡命者研究と、日本の軍事・外交史研究が交わることはなかった。その原因は、検討すべき史資料が世界各地に広がり、多言語に及ぶ一方で、各研究者の視点が自国史・自民族史の枠内に留まっており、ユーラシア規模で展開する亡命者と日本(「ウザクバイ」)との関りを捉えきれない点にあると考えられる。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ本研究では、上記バフティヤールとアイカルルの動向を追うことを中心に据え、利害の一致する東西トルキスタン人亡命者と日本の外交官、武官ら(亡命者側のコードネームで「ウザクバイ」)の交渉とその破綻を考察することを目的とした。これらの背景を成す複雑な亡命者ネットワークや日本側の「防共回廊」、「空のシルクロード」構想を射程に入れ、アフガニスタンを結節点とし、ソ連、中国、トルコ、フランス、英領インド、サウジアラビア、そして日本をもその重要なアクターや舞台として組み込むことによってユーラシア規模で考察するとともに、日本外交史の中に位置づけることを目指すこととした。併せて、「ウザクバイ」の起源とその終焉、言い換えれば上限と下限それぞれのおおよその時期を探求することも目的とした。

3. 研究の方法

本研究は3年計画とし、主な史料として、大学間共同利用言語・文化図書館(パリ、M. チョカイ・アーカイブを所蔵)、アメリカ国立公文書記録管理局、外交史料館(アジア歴史資料センター所収)、島根県立大学メディアセンターなど国内外の文書館史料を利用するほか、アイカルルに関してウズベキスタンで、トルキスタン人亡命者に関してサウジアラビアでインタビュー調査を行い、更にトルコで適宜これらの内容を補う文献を収集する予定であった。また、アイカルルを主人公としたロシア語スパイ小説(初版1973年)が存在するが、報告者はテュルク諸語と比べるとロシア語読解を不得手としているため、外部の協力を得ることにした。

しかし、2020年春以降世界的に猛威を振るったコロナ禍のため、本研究でも2020-2021年度中は国内外での史料調査を実施できず、最終的に研究期間を1年延長し2023年度までとしたが、上記の目的・計画に沿った研究を実施するのは不可能であった。そのため本研究は大幅に計画を見直さざるを得なくなった。

2020年度は当初の計画の代替手段として、デジタルアーカイブであるアジア歴史資料センター所収の外交史料館史料に取り組み、ロシア革命後の中央ユーラシアと同時代の日本との関係を振り返ることにした。その結果、日支陸軍共同防敵協定に基づき1918年から1920年(一部は1921年)にかけて新疆に駐在した日本軍人の活動と関心を検討した。彼らはシベリア出兵の側面支援を目的として派遣されたものであり、本研究では日英双方で記録が比較的良好に残っているイリ駐在の長嶺龜助に主な焦点を当てた。

2021年度も海外調査が実施できなかったため、2020年度に報告者が発見したカザフ自治政府アラシュ・オルダの主要人物の一人で、1919年1月に在ウラジオストク日本総領事館を訪れたラコムジャン・マルセコフによる日本政府宛での支援要請書に関して、長らくアラシュ・オルダの問題に取り組みられている宇山智彦氏(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)と共同研究を進めることとなった。具体的には引き続きアジア歴史資料センター所収の関連文書を収集したほか、マルセコフを応じた渡辺理恵副領事に関するロシア語文献の読解に注力した。

2022年度はコロナ禍による制限も緩和されたため、ロンドン調査(2022年8月・2023年3月、イギリス国立公文書館・大英図書館)と台北調査(2022年11月、中央研究院近代史研究所档案館)を実施した。ロンドン調査では主にイギリス国立公文書館にて、本研究の主要な研究対象であるバフティヤール第1次東トルキスタン共和国関係者の足取り、戦間期日本のアフガニスタン、トルコなどで展開したテュルク系ムスリムへのアプローチなどに関するイギリス外交文書を収集した。加えて、上記の様に既に研究計画の修正によって新疆軍事派遣団に関して一定の成果を得ていたため、イギリス・中華民国側の資料の収集にも努めた。

なお、2021年度よりバフティヤールなど本研究に関する文書の有償デジタル化をインド国立文書館に請求していたが、これらの文書の大半を2022年度中に入手することができ、上記イギリス外交文書と比較・統合することができた。

研究期間を1年間延長して臨んだ2023年度はこれまでの集大成として、本研究の主たる対象の「ウザクバイ」こと戦間期日本の軍人・外交官らによる中央ユーラシアのテュルク系ムスリムへのアプローチの破綻と位置付けられる「近東会議」(1938年、イスタンブル)に焦点を当て、2023年9月にトルコ(トルコ共和国大統領府立共和国文書館)、イギリス(イギリス国立公文書館・大英図書館)、フランス(大学間共同利用言語・文化図書館)、チェコ(チェコ共和国外務省文書館)で会議に関する文書史料を収集した。

4. 研究成果

1. 新疆軍事派遣団

前述したように本研究はコロナ禍によって大幅に計画を見直さざるを得なかったが、当初の計画には含めていなかった新疆軍事派遣団の問題に取り組み、論文としたことは予想外の成果であった。

長嶺らの直接の関心はセミパラチンスク州、セミレチエ州でのロシア内戦の推移にあり、白軍の状況や新疆内での活動について詳細な報告を参謀本部に逐次送っている。その一方、新疆省督軍の楊増新は日本軍人が白軍や白系のロシア領事と結託し、日本軍の派兵、新疆省軍のロシア内戦介入への誘導などを画策しているのではないかと疑った。また、フェルガナ地方での反ソ・ゲリラ運動であるバスマチ運動への日本軍人による関与を示唆する資料も発見した。

このような軍事的関心に加え、長嶺らは領事館設置を試み、ロシア籍のテュルク系商人に接近したほか、ソ連の経済的進出にも強い関心を抱いていた。イギリスの駐カシュガル総領事エサートンも日本商品の流入を指摘し、有望な新疆市場を巡って日本が競争相手になることを認識していた。加えて楊増新も新疆の資源開発のため、日本軍人に借款を秘密裡に打診している。

2022年の追加調査では、長峰らが中華民国主権下でのトルキスタン自治共和国の樹立を望んでいたとするエサートン報告書を発見した。この自治共和国が実現していたとすれば、対ソ橋頭保として機能する日本の傀儡政権になっていたと推測されるため、1930年代に成立する満洲国および蒙疆政権に先立つ試みとして注目すべきだろう。こうした長嶺らの活動と関心は、直接の関係の有無については判断を留保するが、本研究が主軸に据えた「ウザクバイ」の先行例として評価できるものである。

2. マルセコフ要請書

上述したように2021年度は前年度の新疆軍事派遣団の問題を発展させる形で、宇山智彦氏とともにマルセコフ要請書と関連する日本語文書の分析に努め、報告者が編者を務め、2022年3月に出版した論文集に史料解題として掲載した。自治の立場を強化しようとするマルセコフとロシア内戦の動向に強い関心を抱いていた日本政府・軍部、それぞれの背景と認識の齟齬を伝えるこれらの文書の主な意義は以下である。

カザフ知識人には以前からアジアの先進国としての日本への関心があった。またアラシュ・オルダは、日本を通して自らの状況を世界に知らせるという考えをバシキール自治政府と共有していた。

マルセコフの総領事館訪問と支援要請は、当時のアラシュ・オルダの苦境を直接の背景としていた。アラシュ・オルダは、オムスクの白系勢力であるコルチャーク政府と交渉しつつ、少しでも強い立場に立つために外国の援助・承認を得ようとしたと思われる。

日本政府・軍はカザフ人とアラシュ・オルダについても情報を集めていたが、その情報は不正確であった。さらに政府・軍は、この時期までにコルチャーク政府支援の方針を固めており、同政府と距離を置きながらポリシェヴィキと戦うことを強調したマルセコフの姿勢とは齟齬をきたした。

本研究課題との関連では、マルセコフからカザフ知識人たちによる期待に日本政府・軍が応じなかったことは、後者が「ウザクバイ」として中央アジア情勢に関心をもち、積極的に関与する1930年代との相違を示すものであり、「ウザクバイ」の成立過程の解明にも有益と

なった。

3. 近東会議

2023年度は、イギリス外交文書、インド政府関連文書(大英図書館およびインド国立文書館)、「1. 研究開始当初の背景」で触れたチョコカイの側近であったトルキスタン人亡命者アブデュルヴァッハブ・オクタイによるチョコカイ宛書簡(大学間共同利用言語・文化図書館)に基づいて、1938年8月に武富敏彦駐トルコ大使がイスタンブールで主催し、近隣諸国の外交官が政治・経済問題の意見交換を目的として集った「近東会議」について取り組んだ。本研究報告書提出後に論文化する予定であるため詳細な成果については言及を控えるが、「ウザクバイ」がイスタンブールにおいてバフティヤールを含むトルキスタンや北コーカサス出身の亡命者と接触していたこと、トルコ政府が両者の接触や北コーカサス亡命者グループによる反ソ的出版活動を強く警戒していたこと、「ウザクバイ」との接触の時期を含むバフティヤールの1930年代における足取りを解明した。以上により、会議の1週間前に勃発した張鼓峰事件を巡るトルコ外交の対応、在欧テュルク系亡命者の内部対立、そして「ウザクバイ」がインドに亡命していたカシュガルの有力者M.ムヒッティの調略を試みていたことなどが近東会議に背景にあることがわかった。

近東会議を主催したトルコ日本大使館に対して強く抗議したトルコ政府は最終的に曖昧な形で解決を図るが、その一方で会議の前後に「ウザクバイ」と関わったと思われる南北コーカサス、トルキスタン出身の亡命者のトルコ国籍をはく奪し、国外追放としている。トルコ政府によるこの処分については従来の研究では看過されてきたが、「近東会議」の開催が引き金となったことは明白であり、これをもって中央ユーラシア出身のテュルク系ムスリム亡命者を活用した「ウザクバイ」の対ソ戦略の破綻と評価することができる。

コロナ禍による研究計画見直しによりカーブルで「ウザクバイ」の活動を妨害した「ウズベクのゾルゲ」ことM.アイカルルについてウズベキスタンなどで調査できなかったことは遺憾であったが、上記1と2は「ウザクバイ」の起源に、3はその終焉に関するものであり、図らずも「2. 研究の目的」で掲げた「ウザクバイ」の上限と下限について大方の見通しを立てることができたと考えている。

4. その他

ロシア革命前後に移民や亡命者としてユーラシア東西に流出したタタール人コミュニティが刊行したタタール語雑誌『民族の道』・『新民族の道』(1928-1939年・ベルリン、エントリー数約1,560点)、『日本通報』・『新日本通報』(1931年、1932-1938年・東京、エントリー数約1,740点)の記事総目録を作成し、それぞれ自サイトで公開した。

また研究期間を通じて、前述したアイカルルを主人公とするロシア語小説の翻訳を、外部の協力を得て進め、2部構成のうちの第1部をほぼ訳出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野亮介	4. 巻 49
2. 論文標題 新疆軍事派遣団の活動に見る日本の中央アジアへの関心：謀報，経済，プロパガンダ（1918 - 1921年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『ロシア・東欧研究』	6. 最初と最後の頁 26-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Ryosuke ONO
2. 発表標題 Ataturk-era Turkey in the Eyes of Contemporary Japanese Historians/Pan-Asianists
3. 学会等名 Cumhuriyet Tarihyaziminin 100 Yili（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryosuke ONO
2. 発表標題 The Tatar Diaspora 's Socio-religious Lifestyle in Tokyo as Covered in the "Various News" of the Yana Yapon Moxbire
3. 学会等名 Turkologentag 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryosuke ONO
2. 発表標題 Bozkurt Turk 'un Milli Simgesi Olur mu, Olmaz mi?: Milli Arma Projesine (1925-1927) Tepkileri ve Zeki Velidi Togan ' in Milli Tarih Arayisi
3. 学会等名 Turkologentag 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小野亮介
2. 発表標題 亡命者と謀略の街、イスタンブル：日本の反ソ工作と1938年近東会議
3. 学会等名 NPO法人日本トルコ交流協会第26回講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryosuke ONO
2. 発表標題 From Afghanistan with Love: Anti-Soviet Activities of Turkestani Emigres and Japanese Agents in the Late 1930s
3. 学会等名 The Politicization of Islam in East Asia 1850-1950（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小野亮介
2. 発表標題 マルセコフ要請書の前提としての新疆軍事派遣団
3. 学会等名 高等研究所セミナーシリーズ【グローバル・ヒストリー研究の新たな視角】公開講演会：「近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小野亮介
2. 発表標題 ゼキ・ヴェリディ・トガンの著作における過去の参照とその批判（1925-1933）
3. 学会等名 「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」2021年度第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野亮介
2. 発表標題 「駐イリ日本領事」試論：新疆軍事派遣団の活動に見る戦間期日本の中央アジアへの関心（1918-1920年）
3. 学会等名 ロシア・東欧学会2020年度研究大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 野田仁	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 246
3. 書名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照	

1. 著者名 小野亮介・海野典子（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 385
3. 書名 近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ情報の交錯から見る	

1. 著者名 小野亮介・中西雄二・岡野翔太・瀬戸徐映里奈	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 100
3. 書名 『「亡国の越境者」の100年：ネットワークが紡ぐユーラシア近現代史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Milli Yul ham Yana Milli Yul (1928-1939) kursatkece (betmade)
<https://sites.google.com/view/yanamilliyul/>
Yapon Moxbire (1931) ham Yana Yapon Moxbire (1931-1938) kursatkece (betmade)
<https://sites.google.com/view/yanayaponmoxbire/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------